

東アジア三国におけるヴィゴツキー・ルネッサンス試論

Akari YAMASHITA Fumihiko SASE Wu Wei Jung Eun Kyo
山下 明莉* 佐瀬 文彦* 呉 蔚* 鄭 銀教**

Shigeki KASAI Nobuo HIROSE
笠井 茂輝** 廣瀬 信雄***

I. はじめに

1953年、スターリンが没した。しかし、国内的にはスターリンの影響力はその後も各界に残っていた。とはいえ、それまでに口にしてはならなかったことも次第に語られるようになり、読んではならないとされていた書物も少しずつ読まれるようになった。国際的には、雪解けの時代が訪れようとしていた。ヴィゴツキーの名は、ソビエトで伝説となっていて、彼の名を口にするものはいなかったが、心理学の世界では、知る人ぞ知る存在であった。

1962年、米・英・日で、ヴィゴツキーの「思考と言語」（原著は1934年）の英訳、和訳がほぼ同時に出版され、以後ヴィゴツキーの名は、西側諸国にも知られるようになった。いわば、ヴィゴツキーの世界的な評価の始まりである。

1992年、ソビエトに再び大きな政変が生じ、ソ連邦は崩壊した。科学や政治、芸術や文化の面で、混乱と新たな動きが起こった。ヴィゴツキー研究の世界においても、新しい資料や著書が数多く出版される時代になった。これまでヴィゴツキーへの関心は欧米のものであったが、現代では日本、中国、韓国でもルネッサンスが起きている。また、この動きはブラジル、アルゼンチンをはじめとする南米や、スペイン、ポルトガルの南欧においても起きている。生誕120周年を迎えてなお、ヴィゴツキーの考え方や生き方は人々に影響を与えているといえよう。本小論は、日本、北京（中国）、ソウル（韓国）における現代のヴィゴツキーの影響を探る試みである。

II. 発達の最近接領域とインクルーシブ教育

1. 問題提起としての発達の最近接領域とインクルーシブ教育

中村（2004）は、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」理論について、「最近接発達の領域とは、子どもがある課題を独力で解決できる知能の発達水準と、大人の指導の下や自分より能力のある仲間との共同でならば解決できる知能の発達水準とのへだたりをいう。このへだたりは、いまは大人や仲間の援助の下でしか課題の解決はできないが、やがては独力で解決が可能となる知的発達の可能性の領域（つまり、次に続く発達の領域）を意味している。いわば、子どもに成熟しつつある知的発達の可能性の領域のことを、最近接発達の領域と呼ぶのである。」と説明し

* 山梨大学大学院教育学研究科修士課程教育支援科学専攻

** 山梨大学大学院教育学研究科修士課程教科教育専攻身体文化コース

*** 山梨大学大学院教育支援科学講座（障害児教育系）

ている。ヴィゴツキーは、子供ははじめから社会的存在であることを強調し、子供が自分一人では不可能なことを、大人や仲間の援助を受けて、できるようになること、そしてやがては自分一人でもできるようになることに注目していた。ヴィゴツキーに従えば、子供たちは、自分一人で成長するのではなく、集団の中で子供たち同士が協力し合ったり、けんかをしたり、かかわり合ったりすることで発達の最近接領域が刺激され、一歩先へと成長していくと考えられる。

現在の学校現場では、障害のある子供と障害のない子供が可能な限り一緒に学ぶ仕組みである「インクルーシブ教育システム」の構築が進められている。これにより、通常の学級の中で、障害のある子供と障害のない子供のかかわり合いが生じている。「発達の最近接領域」を「共同的な学びの可能性」と考えると、障害のある子供と障害のない子供が、一緒に遊び、学ぶことで、発達の最近接領域は相互に刺激され、子供は一歩先へと成長することができると筆者らは考える。子供たち同士のかかわり合いや学び合いから、人々の多様な在り方を相互に認め合える心も育つのではないだろうか。本章では、発達の最近接領域とインクルーシブ教育場面との接近を試みる。

2. 集団的な遊び活動や模倣活動としての発達の最近接領域

集団的な遊び活動とは、ごっこ遊びやルールのある遊びである。幼児は、このごっこ遊びのような役割のある想像的な遊びの中で、実際の年齢より大人びたふるまいをすることがある。例えば、ままごとでは母親を演じたり、姉を演じたりする。つまり、子供は遊びの中で、現実の自分の水準を超えたような、また少し背伸びをしたような姿をみせる。さらに、5歳児のごっこ遊びでは、いろいろな約束が子供たちの中から提案され、受け入れられて、それに従うことで遊びが持続したり、新たな展開をもたらしたりする。特に、けんかが起こりそうな場面において、ルールを作ることで、お互いの要求や行動を調整していく。学校で行われるような話し合いを遊びの中で行っているともいえる。つまり、遊びが発達を連れてくるのである。ヴィゴツキーは遊びと発達の関係について、「遊びは発達の源泉であり、発達の最近接領域をつくりだす。想像的場面、虚構的場面での行動、随意的企図の創造、生活のプランや意志的動機の形成など、これらすべては、遊びのなかで発生し、子供を発達の高い水準に引き上げる」と述べている。

また、幼児の自由遊びに大人が介入する場面では、保育者の行為や作ったものをそっくり模倣する子供がいる。この模倣は共同学習の中でもみられる。ヴィゴツキーによると、子供の模倣の特質は、無限に大きいとはいえないが、子供が自分自身の可能性の限界を超えた一連の行為を模倣しうる点にある。模倣はその子供の可能性の領域といえるだろう。「まねることは学ぶこと」とよくいわれるが、まさに子供はまねをすることで学び、いずれはまねをしなくても一人でできるようになっていく。そして、ヴィゴツキーは、理解できないものは模倣できないとも述べている。何か問題を解決しようとする時に、模倣が生じるとしたら、それはもちろん「機械的で、自動的な、また無意味な模倣ではなく、理解に基づいた何らかの知的操作の知性的な模倣行為」であり、模倣とは「子供は自主的に遂行できなくても、それを学ぶことができたり、それを指導や協力の下で遂行したりできる…」ことを意味する。よって、子供の模倣活動は、やがて自分のできるようになるための発達の最近接領域を表していると考えられる。

3. 社会的文脈における障害観

ヴィゴツキー以前の専門家は、器質的（生物学的）欠陥 - 盲、ろう - そのものに注目してい

たが、ヴィゴツキーは欠陥それ自体ではなく、その欠陥が「子供による文化や人類の社会的経験の獲得を妨げる」という点に注目していた（菅田・広瀬，2017）。つまり、ヴィゴツキーは障害の社会的側面をとらえていたのである。その際、ヴィゴツキーは「二次的症狀」という概念を用いている。司城（2010）によると、「二次的症狀」とは、生物学的・器質的な特徴から直接導きだされる障害である「一次的」症狀の基礎の上に、周囲とのかかわりを通して構築されていく障害のことであり、障害児はその障害ゆえに集団から脱落し、集団的コミュニケーション、その子どもと周囲の人々との協同や相互作用などの正常な発達を妨害する一連の特質が生ずるものとされる」のである。また、逆に、その集団からの脱落や社会的剥離などが発達過程に不利に影響し、二次的症狀を引き起こすとヴィゴツキーは主張する。つまり、高次の精神機能や高次の性格論的形成の発達不全（発達異常）を引き起こしたり、逆に発達過程を修正したりするのは、その子供の生活条件などの社会的環境であるといえる。そして、ヴィゴツキーは「二次的症狀」への働きかけは有効であり、「二次的症狀」は原則的には予防でき、治療・教育的に取り除くことができる」と主張している。このことから、教育において、集団の中で、障害のない子供と障害のある子供が可能な限り共に学び、コミュニケーションをとることができるように環境を整えることで子供の「二次的症狀」を予防できると考える。さらに、子供たちはかかわり合いを持つことで社会性を身につけ、そしてお互いの発達の最近接領域に影響し合いながら、一歩先へと成長することができる」と考える。

4. 発達の最近接領域論からみたインクルーシブ教育の展望

前述してきたように、現在インクルーシブ教育システムの構築が進められていることによって、現象的に、学校の中で障害のある子供と障害のない子供のかかわり合いが生じている。その中で、障害の有無にかかわらず、子供たちは一緒に遊んだり、協力し合ったり、衝突したりすることで、お互いの発達の最近接領域に影響を与え合っていると筆者は考える。また、一人一人違った個性をもつ子供たちが、それぞれが持つ良いところを模倣することや、自分とは違う考えを理解し認めることは、その子供の次の発達につながっていると考える。そして、「発達の最近接領域」を「共同的な学びの可能性」と考えると、「インクルーシブ状態」という多様な子供が共に学ぶ状態は発達の最近接領域を構成しているといえるだろう。

子供がごっこ遊びや役割のある遊びの中で、実際の年齢より大人びたふるまいをしたり、人や物を別のものに見立てたりすることで、想像力は育っていく。また、様々な友達とかかわり、友達同士でルールを決めて、それを共有して遊ぶ中で、社会性が育っていく。そして、ごっこ遊びは、子供たちの想像の場面だが、子供の現実の生活が反映されているだろうし、役割のある遊びにおける、子供たちの言動は、子供が実際の生活で見たり聞いたり経験したりしたことが反映されているだろう。つまり、子供は遊びのなかで、大人の言動を模倣していると考えられる。したがって子供たちは、子供たちだけでお互いの発達の最近接領域を刺激し合っているのではないといえるだろう。障害の有無にかかわらず、多様な個性を持つ子供たちがただ時間と空間を共有するだけでは、効果的な学び合いは生じないと筆者は考える。集団で遊んでいる子供たちの中に自然と介入し援助したり、お互いの良さに気づききっかけを与えたり、共同的な活動を設定し学び合う機会を提供したりなどの教師（大人）の工夫が必要であろう。明神・広瀬・岡・千明・榊原（2003）が述べているように、子供の能力を見極め、今できることと、ヒントや支援があればで

きるであろうことの間を教育の力でどうつなげていくかを教師は考える必要がある。今後、インクルーシブ教育における教師の役割を考えていく上で、ヴィゴツキーの考えを学ぶことは無駄ではないだろう。

Ⅲ. 高校生年齢における発達の最近接領域の解釈と分析

1. ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」論について

すでに発達している面（発達の現在のレベル）とその子供の潜在的な学習能力（大人の指導下で行われる問題解決の過程やより能力的に高い同年齢たちとの共同によって行われる問題解決の過程で決定されること）との間に着目し、ヴィゴツキーはこの二つの能力間にある差を「発達の最近接領域」と呼んだ。

障害児の知能検査においてヴィゴツキーは「エコロジカル」な正当性が貧弱なことを指摘し、知能検査の限界を述べた最初の人であった。ヴィゴツキーは日常生活場面への移行可能性は非常に疑わしいものであると説き、障害の構造における特別な変化が発達の途上で教育の影響によって起こると主張した。

発達の最近接領域はその子供の学習可能性を反映しながら変化する。このような見方をすることによって、知的障害と教育的放任との違い、一次的な知的障害と貧困家庭出身のバイリンガル児が示す二次的遅れとの間の質的な違いが説明される。標準化された心理テストの結果によれば、実際の機能の面で遅れているように見える子供たちも、ヴィゴツキーやその後継者が示したように、大人の援助を利用する能力においては劇的に変化することがわかった。また、当然社会的な存在である子供たちは、不自然な実験室状況よりも、普段の社会的な状況にいる時が最良であるとヴィゴツキーは述べた。つまり子供は、大人に助けられ、その能力を伸ばすことのできるような社会的状況にあるべきだと彼は考えた。そのことを子供の自然的な発達に対する妨害と考えずに、自然的な発達の一部であると彼は捉えた。子供というのは、孤独では学ぶことができないのである。

2. 高等学校でみる「発達の最近接領域」論

学校において教師が生徒にかかわる時にヴィゴツキーの考え方は無意識のうちに用いられている。単に教師が授業を行うだけではなく、放課後や空き時間を通じて学習会や質問を受ける時間を設けると、学習に対する生徒の態度や成績は何もしない場合に比べて大きくプラスに転じる。わからないままで、対処できない問題が教師の力を借りることによって理解され学習が大いに飛躍することは経験上よく知られている。「大人が子供を助け、伸ばしてやるような社会であるべきだ」というヴィゴツキーの考え方によって以下の現象は補強される。

実例①

放課後に自主学習会を開き、生徒が自主的に学習に取り組むことができる教室を設け、教師はその教室に待機する。これにより生徒はわからない問題があると気軽に教師に質問をすることができる。その結果、生徒に自ら学習に取り組もうとする主体性が芽生え、一人でも学習に取り組むことができるようになる。そして、学習に取り組む習慣が構築され成績が上がる。また、教師が質問に答える場所を多くの生徒や教師が使う広い廊下の片側に設け、パーテーションを用いて

机と教師用の椅子，質問する生徒の椅子を用意して質問に答える。この取り組みは，自主学習会に参加していない生徒がその廊下を通った時に質問をしている生徒を見ることで自分も勉強しなくてはならないという気持ちを持たせる上で効果があった。教師による生徒の発達の最近接領域への働きかけによってその効果が現れた。

事例②

定期試験と定期試験の間は一カ月半から二カ月程度期間があいてしまうため，生徒は前回の定期試験が終わると次の定期試験まで，学習に積極的に取り組まなくなる傾向にある。そのため，週一度，一週間の学習内容を把握できているか確認するためと，学習に取り組む習慣をつけさせるために週テストを行う。これにより，生徒は毎週実施される週テストのために，毎日学習に取り組むという習慣をつけることができる。この習慣により成績が伸び，定期試験や全国規模の模擬試験においても成績が上がる。教師側の少しの働きかけで発達の最近接領域が刺激され，生徒の成績は大いに上がる。

事例③

全国規模の模擬試験の前に，その模擬試験で過去に行われた問題を配布する学校は少なくない。しかし過去問題の配布にとどまらず，その問題の解説を行うと生徒の力がつく。過去問題も昨年の問題だけではなく，過去数年間分の問題も配布し，できる限り放課後や空き時間を利用して解説を行うと模擬試験の成績は上がる。これは模擬試験の際に，生徒が過去に解いた問題とその解き方を思い出すことができたためと，難問を解くための思考力が機能したためであると考えられる。スポーツにおいても強いチームと試合をすることで自分のチームの弱い点や修正すべき点を生徒が考え，より強いチームに成長することができることと同じであると考えられる。難しい過去問題を生徒に配り解説することにより生徒の成績は上がる傾向にある。これも教師が生徒の発達の最近接領域に学習面で働きかけた結果であると考えられる。

事例④

生徒の中には，自分一人で学習計画を立て，実行することが困難である者もいる。そこで，土曜日に学習会を実施している進学校は多い。土曜日に学習会を学校で実施することにより，生徒は土曜日の朝から学習に取り組むことができるようになる。当然前日の金曜日にも規則正しい生活ができ，早く寝て土曜日に備える。土曜日にも朝から学習を進めることによって成績の向上が期待できる。発達の最近接領域が広がると考えられる。

3. 高等学校の数学教育における発達の最近接領域

筆者は，生徒が数学を理解するためには四つの段階があると考えている。第一は，何よりも大切な「勉強をやるという気持ちを生徒が持つ段階」である。第二は，「生徒が教師の説明を聞いて理解することができる段階」である。言い換えると，数学の教科書に書かれている公式を使い，基礎的な計算ができる段階である。第三は，「生徒が自分一人の力で問題を解き，その問題について解説することができる段階」である。この段階では，生徒は，公式の意味を説明することができ，解答の導き方を十分に理解しているため，問題集の問題を自分一人の力で解くことができる。第四は，「数学の問題に対する応用と発展の段階」である。この段階では，生徒は自分なりに「数学はすごいな」と問題を解いていく過程に楽しさを見出すことができ，また，「問題を数学的な思考を用いて解くことに感動」を味わうことができる。この段階になると，生徒に

応用問題に取り組む意欲が高まり、難問にもチャレンジする力が備わってくる。進学校において授業が目指すのはこの段階である。前述した高等学校での実践は、数学教育における第四の段階のような、主体的に学習に取り組む生徒の姿勢を育むことを目的としたものである。

生徒がある数学の問題を自分一人の力で解くことができる知能の発達水準と、明日の水準、つまり教師の手助けや共同によって、近いうちに自分一人の力でできるようになると予想される水準との間の領域は発達の最近接領域である。また、生徒が教科学習を通して学力的発達を遂げ、態度や意欲の面で成長できる可能性の領域も、発達の最近接領域である。生徒にとっての発達の最近接領域は、「生徒が自ら学びたいと思ひ、数学の問題を解くことが楽しいと感じることができ領域」のことであると思われる。

ヴィゴツキーの発達の最近接領域論の観点に立って考えると、数学の教科教育とは、教師が導く模倣の学習である。模倣は、後に自分一人の力でできるようになるための重要な活動なのである。ヴィゴツキーは、理解できないものは模倣できない、模倣活動はやがては自分一人の力でできるようになるための発達の最近接領域である述べている。これは、初めのうちは教師の模倣として行っていた学習や、教師の協力がなければ解くことができなかった問題が、やがて自分一人の力でできるようになるという考えである。ヴィゴツキーの発達の最近接領域論から考えると、今できることと、これからすぐになれるようになるであろうこととの間の領域を教師の力でどうつなげていくかということが重要である。ヴィゴツキーが「子供の発達は教育の後からついてくる」として、教育の役割を重視しているように、教師は生徒に対して常に適切な教育的働きかけをしていかなければならないのである。まさに、教育が発達の最近接領域を創り出すのである。高等学校の教育においても、教師が生徒の様々な発達の最近接領域を刺激することによって、生徒の学力は上がる。その発達の最近接領域を刺激することが教科教育における教師の仕事であると筆者は考える。このように、ヴィゴツキーの考えを用いて、高等学校の数学教育の分野をも説明することができる。

IV. 北京（中国）におけるヴィゴツキー論

1. 現代中国におけるヴィゴツキーの影響

ヴィゴツキーは旧ソ連邦の優れた心理学者であり、短い一生で多くの科学的な心理学研究領域に携わった人である。彼が創設した「文化-歴史理論」は心理学の発展に大きな意義を与えている。特に、彼の「発達の最近接領域」などの心理学と教育学の理論は、中国で現在進行する素質教育（1）に積極的意義を見出していると考えられる。

次に、中国語に翻訳されたヴィゴツキーの著作を紹介する。現在、中国では、次のようなヴィゴツキー著作を入手することができる。例えば『思考と言語』（中国語：思维与语言）、『高次精神機能の発達』（中国語：高级心理机能的社会起源理论）、『障害児のための発達診断および育児相談』（中国語：缺陷儿童心理学研究）など。また、中国での図書に關係するネットショッピングのサイトにおいて、一番アクセスされるヴィゴツキーの著作は『思考と言語』である。

近年、世界でヴィゴツキー・ブームが起こっているが、中国の教育にも影響を与えていることは明らかである。

2. 中国でのヴィゴツキー研究が示すもの

ヴィゴツキーの理論及び西欧の最新研究に基づきながら、ヴィゴツキーが中国の現代の教育に与えた影響を概観すると、以下の三つの面にまとめることができる。

第一に、友達・仲間ができる環境を構築し、子供たちが協力して学習に取り組むことの重要視である。ヴィゴツキーの「文化-歴史理論」は社会・文化と子供の認識の発達を重視する。社会・文化の影響を受けて、一人の子供が自分よりもっと才能を持っている人々と交流することによって、子供たちの発達の最近接領域も大いに刺激される。そのため、小中学校の教育改革において、学校が一つの文化システムとして、子供間の付き合いと学習に有利な環境をいかに作り出すかは、中国の教育改革が直面している問題である。この問題を首尾よく解決することによって、子供の学習と認知の発展に効果的な手段—仲間との付き合い—はその役割を果たすことができ、子供の学習を促すことができる。

第二に、「主体性教育」が必要であり、それは教師の教育効果を助けることになるという考えである。ヴィゴツキーは子供自身の活動の心理的な基礎を重視して、活動とは子供が主体であり、環境は媒介であると考えている。活動が環境によって媒介されてこそ、子供の認識を進展させることができると考えられる。教師自身の資質、観念などは子供の活動、特に思考に影響する。そして、教師の働きかけは子供の活動に有利な環境を作り、子供の主体性を発揮させることに作用する。そのため、中国の伝統的な教育観念（応試教育）(2)を変え、子供の自主性を育成することを教育の最高の境地とするのは主体性教育のキーポイントである。これに応じて、教師を教育環境の優秀な組織者にするために、教師の理論的レベルを高める。これが中国の教育改革における教師の力量向上に関する重要なポイントである。

第三に、中国の伝統的な教育の評価方法が変わり、「プロセス・アセスメント」と「ダイナミック・アセスメント」が強調されるようになったことへのヴィゴツキーの影響である。教育の評価は、教育する過程が重要な部分であり、教育する方向の影響も受ける。「プロセス・アセスメント」は子供の成績を重視することを強調するだけでなく、日常の学習の状況と結びつけて客観的に評価することを意味する。また、「ダイナミック・アセスメント」は子供のことを長い目で見ることを重視することであり、子供たちの大いなる潜在力と変化することへのしなやかさに目を向けることである。それに対して、これまでの中国の伝統的な教育の評価方法は試験の結果が最も重要とされ、創造の精神は軽視されてきた。したがって、子供の成長レベルを評価する際、プロセス・アセスメント及びダイナミック・アセスメントの考え方を取り入れていくべきである。実際の成長の状況をより正確に理解できる上、ある程度素質教育の方向を導くことができる。

また、中国は「科学的発展観」を指導原理の一つに追加したので、中国の社会建設や文化建設などを含む全面的な建設の必要性を論じるようになった。そして、優れたマルクス主義(3)心理学者ヴィゴツキーの理論は、その面でも重要な理論の一つであると考えられる。

3. 中国での素質教育とヴィゴツキー

ここでは、1980年代から1990年代にかけての教育理念について述べる。1980年以後の中国経済の急速な発展に伴って、淘汰方式による少数精鋭の選抜を行う「応試教育」(1)によって養成された人材は、社会的ニーズの変化に対応できなくなった。そのため、教育自体の変革が求められた。1990年代、「素質教育」が全ての教育段階で求められ、中国の教育理念は大きく変わった。

教育学的に見れば、人間の素質は、教育の基礎としての前提条件であるし、さらに、教育によって、発達を促していけるものでもあり、その他諸能力と同じように教えることができるものである。また、学術と政策上の規定からまとめると、素質教育とは、国民の素質向上を主旨とするが、子供の創造精神と実践能力の育成に力点を置く教育である。つまり、応試教育の弊害に対する子供の全面的発展を求めるのが教育の基礎となっている。

そして、この素質教育は、ヴィゴツキーの理論に基づいていて、その本質は教育という外界条件を通じて、人間の心理機能に作用して、より高次の水準へ発展させることにある。また、人間の高次の心理機能は文化・歴史的に社会の中で形成されると考えられている。現在、中国ではこの素質教育の考え方に沿って教育内容や方法の改革が進められている。

このように、中国、特に北京において重視されている素質教育や主体性教育、教育の評価方法、教育観についてもヴィゴツキーの考え方をを用いて説明することができる。

V. ソウル（韓国）における現代ヴィゴツキー論

1. ソウルにおけるヴィゴツキーの「文化—歴史理論」の現代的意味

現在の韓国では、ヴィゴツキーの考え方を導入した数学の英才教育が知られている。ヴィゴツキーによる考えを基盤に数学の英才教育において適切な授業モデルの提示、教室文化の意義や教師の役割が強調されている。ヴィゴツキーの考えに従った数学の英才教育における中心的な特徴は、それが発達の最近接領域を作り出すことである。つまり学習は、子供が周りの人と相互作用し、友達と協働する時にこそ生まれる、多様な内的発達過程である。この過程が内化すれば、それらは、子供の自主的な発達の成就の一部になる。このような観点からすれば学習と発達に違いはない。しかし、適切に組織された学習は精神発達をもたらして学習を多様な発達過程として始動させる。したがって、学習は、人間にだけ存在する文化的に組織された精神機能を開発する必須の過程であり、普遍的な役割を担う。これは、学習が子供にとって周りの人たちの知的な文化的な生活の中に入るための前提になることである。このようなヴィゴツキーの「文化—歴史理論」について、韓国において様々な検討が継続中である。とりわけ数学教育においてヴィゴツキーの理論を導入した背景には、現代の韓国における数学の英才教育熱がある。

なお、現在の韓国の育児において注目を集めているのは、アドラー育児法である。これは日本での動向に連動したものであろう。アドラー育児法とは、子供を主体的で自立的な人に育てることを重視し、親と子供の関係を同等と考えている。これは韓国の伝統的な育児法（親と子供の情緒的な繋がりを強調）とは異なる。アドラーは、保護者に子供を一方向的に統制し、叱らないでほしいと述べ、特に、子供に問題行動がみられた場合は、その行動そのものではなく、その行動の目的は何かを把握することを優先するべきであるとしている。また、アドラーは子供の不適切な行動より、適切な行動に注目するように述べている。このようなアドラー育児法について、専門家は、韓国では競争社会の副作用がますます深刻になり、個人の主体性を尊重するアドラー育児法が流行している可能性があるとして分析している。しかし、その一方で、韓国でのアドラー育児法に対する関心は一時的だという考えもある。現在流行しているからといってアドラーの育児法を行うのではなく、保護者が中心となってアドラー哲学の本質を十分に理解する必要がある。

2. 韓国におけるヴィゴツキーとピアジェ

しかし韓国では、ヴィゴツキー理論よりも、ピアジェの理論が取り入れられることが多い。そこで、まずピアジェの子供に対する考え方を説明する。ピアジェは、子供は大人が提供する知識をそのまま吸収するのではなく、自分の認知構造に合わせて知識を構成することができる能動的な存在であると捉えた。伝統的な教育が子供たちに知識を教えることに集中していた時代において、ピアジェは学習の主体は子供であることに注意を向けたのである。

次に、ヴィゴツキーとピアジェの考えの類似点と相違点を説明する。ヴィゴツキーとピアジェの考えの類似点を以下に示す。

- ①子供の発達は質的な成長であると同時に段階を経ているとした点。
- ②学習は能動的に行われるとした点。
- ③知識の伝達は文化と関連があるとした点。
- ④抽象的で論理的な思考を強調した点。

次に、相違点を示す。第一に、ピアジェは前操作期の子供の言語が自己中心性という特徴を持っていると説明した点である。彼は、自己中心的言語は自己中心的な思考を示すものであり、これは成長していくにつれて、次第に減少するとみた。一方、ヴィゴツキーは自己中心的言語の使用が単純に自分だけの考えを表現するのではなく、問題解決に向けた自己の道具だと考えた。別々に発生した自己と言語は、一定時間が過ぎた後お互いに結びついて、そのような結びつきが子供の発達過程で変化して新たに機能し始める。第二に、ピアジェは児童と事物との相互作用を強調した一方、ヴィゴツキーは人々との相互作用が幼児の言語的思考を決定するものとみている点である。第三に、ピアジェが幼児とは自ら学習し、自分一人の力で発見者となると見ている一方、ヴィゴツキーは人間社会で育っていく幼児たちが発見者となるとみている点である。しかし、これらは人間の発達を同時的に説明しているという理解も韓国にはある。韓国の場合、子供の発達に関してピアジェとヴィゴツキーは並んで検討されている。

そして、韓国では、自発的な活動や用意された教材を通じて自分の力で答えを発見できる能力を早くから学習させている。そして、判断と検証の力を身につける教育をピアジェから学び、ヴィゴツキーからは、教師と子供の両方が学習課題選定に参加しなければならないことを学んでいる。このように選定された学習課題を解決する際に内的資源や外的資源を活用できるようにしなければならない。

VI. ヴィゴツキーと現代の障害児に関する生理学的知見

1. ヴィゴツキーの障害理解と生理的発達

ヴィゴツキーは『欠陥学の基礎』の中で、「知的な障害によって発達が妨げられている子どもたちは、単純に彼らの仲間よりも発達が遅れているということではない。むしろ、そのような子どもたちは別な発達をしているのである。」と述べており、障害児の発達に独自性があることを指摘している。また、個々の子供の発達としてみるならば、決して障害という概念で捉える必要性はないとも述べている。

近年の障害児に対する生理学的な研究では、障害児と健常児との間に生理学的な違いがあり、障害児に生理学的特徴があることを報告している。特に、知的能力や行動特性などを司る脳に関

する研究では、様々な構造的・機能的な違いがあると指摘されている。知的障害児に関する脳研究は国内外問わずまだまだ乏しい状況であるが、近年、自閉症スペクトラム障害（ASD）や注意欠如多動性障害（ADHD）児に関する研究が進められており、様々な知見が得られている。

ASD児の脳構造に関する研究では、乳幼児期における前頭葉、側頭葉、および扁桃体の異常な体積増加（Courchesne et al., 2007）や青年期における下前頭回の体積減少（Kosaka et al., 2010）など局所的な脳体積の異常が報告されている。また、脳活動に関する検討では、様々な認知課題やこころの理論等におけるASD児・者の前頭葉活動が健常者とは異なることが報告されている（Kawakubo et al., 2009; Kuwabara et al., 2006; Nakadoi et al., 2012）。ADHD児の前頭前野活動に関する研究では、Trail-Makingテストやストループ課題などにおいて、前頭前野活動が健常児とは異なることが指摘されている（Weber et al., 2005; Negoro et al., 2010）。

これらの研究からASD児やADHD児は、脳構造や機能面において健常児とは異なる点があり、健常児との比較によりこの部分が障害として捉えられることができる。しかし、障害児における生活の困難性がこの脳の障害のみによって生じていると言い難い。ASD児やADHD児における前頭前野活動の機能不全は、実行機能や認知機能の不全をもたらしていると考えられており、この問題が社会生活を送るうえでの困難性に影響を及ぼしていると考えられる。

このことは、ヴィゴツキーも述べているとおり、生物学的な要因としての障害とそれらの社会的影響について分けて理解し、障害児本人のみならず社会的相互関係に着目した指導に留意していく必要があると考えられる。

2. 日常生活における観察の重要性

生理学的な研究では、日常生活における障害児の状態を調査することは非常に困難である。生理学的な研究、特に脳科学研究においては、MEGやCT、MRIなどの機器を用いることが多く、これらの機器を使用できる環境は実験室のみである（Castelli et al., 2002; Pierce et al., 2001）。このように障害児に関する研究では、実験環境下での検討はされているが、日常生活における生理学的な検討はほとんど見られず、この点が生理学的研究の限界だともいえる。

これまでに行われてきた生理学的な評価を積み重ねることにより障害児の実体へ近づいていけるが、非日常生活における状態をいかに調査しても日常生活における真の実体を見ることは難しい。しかし、ヴィゴツキーが述べているとおり、「大人が子供を助け、伸ばしてやるような社会的状況が正常である。」と考えれば、大人が手助けをする状況こそが通常の日常生活といえ、ヴィゴツキーが提唱している「発達の最近接領域」での評価にこそ、日常生活における評価としての妥当性があると考えられる。

自然な社会的環境、すなわちヴィゴツキーのいう、子どもが大人に助けられながら生活や感情や知識・技能を学んでいく、ごく日常的な場面での生理学的研究の方法や視点が、とりわけ障害児を対象とする研究において必要であり、重要であるといわねばならない。

（執筆担当：Ⅰ－広瀬，Ⅱ－山下，Ⅲ－佐瀬，Ⅳ－呉，Ⅴ－鄭，Ⅵ－笠井）

注釈

（1） 素質教育：国民全体の素質を伸ばすことを主旨として、子供たちの総体的・基本的な素質を伸ばし、

子供たちの潜在能力を開発することを重視する。子供の思想道徳や科学文化や労働技術や心理素質などを諸方面から、偏りなく発展させることを特色とする教育理念。具体的には、個人の責任感、困難を乗り越えるための力や仲間との協調性などの個人の素質を育む教育。中国語で「素質」とは可能性を意味する。

- (2) 中国の伝統的な教育（応試教育）：中国の学校教育（特に小中学校の教育）において、社会で生きていくために必要な内容を子供が習得することを目的とするのではなく、単に試験に対処して、高い点数を獲得し、進学することを目標とする教育。知識だけを重視し、道徳教育や情操教育を軽視する教育理念。
- (3) マルクス主義：カール・マルクス（1818年5月5日-1883年3月14日）とフリードリヒ・エンゲルス（1820年11月28日-1895年8月5日）によって展開された思想をベースとして確立された社会主義思想体系の一つである。しばしば科学的社会主義ともいわれる。マルクス主義では、資本を社会の共有財産に変えることによって、労働者が資本を増殖するためだけに生きるという賃労働の悲惨な性質を廃止し、階級のない協同社会をめざすとしている。マルクス主義は中国の党の根本的な指導思想であり、党と国家の事業を発展させる科学的な指導方針である。今日、依然としてマルクス主義理論の学習を高度に重視し、思想的武器としてうまく運用するよう子供たちの教育が行われている。

文献

- 1) A. A. レオンチェフ著・菅田洋一郎 監訳・広瀬信雄 訳（2017）新装改訂版 ヴィゴツキーの生涯. 新読書社.
- 2) Castelli, F., Frith, C., Happé, F., and Frith, U. (2002) Autism, Asperger syndrome and brain mechanisms for the attribution of mental states to animated shapes. *Brain*, 125, 1839-1849.
- 3) Courchesne, E., Pierce, K., Schumann, C. M., Redcay, E., Buckwalter, J. A., Kennedy, D. P., and Morgan, J. (2007) Mapping early brain development in autism. *Neuron*, 56 (2), 399-413.
- 4) Jin-Kon Hong and Eun-Joo Kang (2011) On application of Vygotsky's theory in math education for gifted students. *The Korean Journal for History of Mathematics*, 24, 4, 181-200.
- 5) Kawakubo, Y., Kuwabara, H., Watanabe, K., Minowa, M., Someya, T., Minowa, I., Kono, T., Nishida, H., Sugiyama, T., Kato, N., and Kasai, K. (2009) Impaired prefrontal hemodynamic maturation in autism and unaffected siblings. *PLoS One*, 4 (9), e6881.
- 6) Kosaka, H., Omori, M., Munesue, T., Ishitobi, M., Matsumura, Y., Takahashi, T., Narita, K., Murata, T., Saito, DN., Uchiyama, H., Morita, T., Kikuchi, M., Mizukami, K., Okazawa, H., Sadato, N., and Wada, Y. (2010) Smaller insula and inferior frontal volumes in young adults with pervasive developmental disorders. *Neuroimage*, 50 (4), 1357-1363.
- 7) Kuwabara, H., Kasai, K., Takizawa, R., Kawakubo, Y., Yamasue, H., Rogers, M. A., Ishijima, M., Watanabe, K., and Kato, N. (2006) Decreased prefrontal activation during letter fluency task in adults with pervasive developmental disorders: a near-infrared

- spectroscopy study. *Behav. Brain Res.*, 172 (2), 272-277.
- 8) 明神もと子 編著・広瀬信雄・岡輝彦・千明博美・榊原剛 (2003) はじめて学ぶヴィゴツキー心理学～その生き方と子ども研究～. 新読書社.
 - 9) Nakadoi, Y., Sumitani, S., Watanabe, Y., Akiyama, M., Yamashita, N., and Ohmori, T. (2012) Multi-channel near-infrared spectroscopy shows reduced activation in the prefrontal cortex during facial expression processing in pervasive developmental disorder. *Psychiatry Clin. Neurosci.*, 66 (1), 26-33.
 - 10) 中村和夫 (2004) ヴィゴツキー心理学 完全読本. 新読書社.
 - 11) Negoro, H., Sawada, M., Iida, J., Ota, T., Tanaka, S., Kishimoto, T. (2010) Prefrontal dysfunction in attention-deficit/hyperactivity disorder as measured by near-infrared spectroscopy. *Child Psychiatry Hum Dev*, 41 (2), 193-203.
 - 12) 太田豊作 (2013) 自閉症スペクトラム障害と注意欠如・多動性障害のNIRS. *精神科*, 23 (4), 426-431.
 - 13) Pierce, K., Müller, R. A., Ambrose, J., Allen, G., and Courchesne, E. (2001) Face processing occurs outside the fusiform 'face area' in autism: evidence from functional MRI. *Brain*, 124, 2059-2073.
 - 14) 司城紀代美 (2010) ヴィゴツキー障害学の今日的位置づけ—「回り道」の概念による特別支援教育研究の可能性—. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 50, 119-126.
 - 15) ヴィゴツキー 著・土井捷三・神谷栄司 訳 (2014) 「発達の最近接領域」の理論—教授・学習過程における子どもの発達. 三学出版.
 - 16) Weber, P., Lutshg, J., Fahnenstich, H. (2005) Cerebral hemodynamic changes in response to an executive function task in children with attention-deficit hyperactivity disorder measured by near-infrared spectroscopy. *J Dev Behav Pediatr*, 26 (2), 105-111.
 - 17) Yoo, Yoon Yung (2010) Discussion on the Influence of Jean Piaget's Theory of Concept Formation on Early Childhood Education. *Journal of Future Early Childhood Education*, 17, 3, 349-372.
 - 18) 齐晓燕・邵景進・陰山燕 (2004) 论维果茨基对我国心理素质教育的贡献. *Journal of Inner Mongolia Normal University (Education Science)*, 第7期, 59-61.
 - 19) 鄒曉燕 (2001) "Vygotsky Craze" and its Enlightenment to the Educational Reform in China. *辽宁师范大学学报: 社会科学版*第24, 第4期, 40-42.
 - 20) 王文静 (2000) The Inspiration of Vygotsky's "Zone of Proximal Development" Theory to Instructional Reform in China. *心理学探新*, 第2期, 17-19.
 - 21) 魏文熙 (2011) 中国の高等学校における『素質教育』に関する研究. 九州大学大学院.

<http://www.hues.kyushu-u.ac.jp/education/student/pdf/2011/2HE10044R.pdf> (2017年6月12日取得)